

KANAGAWA HOHYUH CLUB

神奈川県放射線友の会  
神奈川放友会



Newsletter

Vol.13.No3.Jun.2020  
第 51 号

神奈川県放射線友の会 (略称 神奈川放友会)

〒231-0033 横浜市中区長者町 4 丁目 9 番地 8 号

ストーク伊勢佐木 1 番館 501 号

TEL 045-681-7573 FAX 045-681-7578

発行人 長谷川 武

発行日 2020 年(令和 2 年) 7 月 1 日

## 「COVID-19」に思う！！

神奈川県放射線友の会 副会長 早瀬 武雄

4 月 7 日首相が東京都など 7 都府県を対象に緊急事態宣言を発令。5 月 25 日緊急事態宣言を全面解除されましたが第 2 波の感染が心配になっています。

約 100 年前の 1918 年スペイン風邪が流行しました。当時、日本の報道でのスペイン風邪の俗称は「流行性感冒」であったと言われています。

日本に於けるスペイン風邪流行は「前流行」と「後流行」の二波に別れるという。「前流行」は 1918 年の感染拡大。「後流行」は 1919 年の感染拡大です。どちらも同じ H1N1 型のウイルスが原因であったが、現在の研究では「後流行」の方が致死率が高く、この二つの流行の間にウイルスに変異が生じた可能性もあるという。ともあれ、このスペイン風邪によって、最終的に当時の日本内地の総人口約 5600 万人のうち、0.8%強に当たる 45 万人が死亡しました。(『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界大戦』藤原書店、速水融著)

当時は船旅の時代でしたが、今は飛行機での移動が主流の時代であることから拡散のスピードを速めたのです。そして、スペイン風邪は当時未知のウイルスであったために対応が出来なかった結果です。今回の新型コロナウイルスの感染については 3 密対策による感染防止、治療薬・ワクチンの開発等が光明であります。

COVID-19 の流行で世界が変わり、人の往来・物資の流通が止まり、オリンピックに向けてインバウンド(訪日外国人観光)に力を入れていた日本の観光地への影響は、はかり知れません。

この様に、人・物の動きが止まったことで世界的な経済の落ち込みが生じましたが、ネットワーク化した世界は益々活発な動きがあります。ある新聞に「COVID-19 の封じ込めで民主制と IT 全体主義どちらに軍配が上がるか」について記載されていました。(読売新聞「あすへの考」ネットワーク化した世界)

「米欧が都市封鎖など強硬策をためらい感染拡大を許したのに対し、ある国は個人の権利を無視した強硬策で奏功しつつあるようです。」それが最終結果であるなら、IT 全体主義が正当性を得てしまいます。

米ソ冷戦に比べ、米国は魅力を減じ、ある国は旧ソ連より魅力的に映ります。民主主義が第 2 次冷戦後？も勝利する保証はないのです。

私は、この記事に関心を持ちました。ユーラシア大陸の東端の日本、欧州の様にペストの大流行で全人口の

4 分の 1~3 分の 1 にあたる 2500 万人の死を経験したことと比べ、このような感染による危機の経験が少ない日本では「都市封鎖」を強行的には行えません。また、IT を使った強制的な国民管理は行えません。従って、民主主義で日本流の COVID-19 感染収束作戦が成功するか日本人が試されています。大変重要な分かれ道になるのではないかと考えています。

COVID-19 収束後、日本には COVID-19 拡散中でも衰えていなかったネットワーク化が益々重要になります。専門家はこの機会に通信速度は 4G の 20 倍、同時接続数は 4G の 10 倍、遅延速度は 10 分の 1 となる 5G (第 5 世代移動通信システム) そして 6G (第 6 世代移動通信システム) の通信システムの導入が必要だと言っています。

また、テレワークの活用によりサイバー攻撃への警戒が必要になってきます。

サイバー攻撃の対策として東芝が、情報漏洩やハッキングが理論上不可能な量子暗号通信に関する事業を 2020 年度から開始することが報道されています。

量子暗号通信は、金融取引など秘匿性の高い情報を安全にやり取りするために用いられる暗号通信技術の一つ。暗号化して解読できないようにするために、復号に必要な鍵を光子に乗せて伝送する。光子は何かに触れると状態が必ず変化するという量子学的な性質を活用して、第三者による鍵の盗難を確実に検知できるという仕組みです。東芝が量子暗号通信を実用化させるのには、量子コンピューターの開発が盛んになってきている背景があるとみられ、量子コンピューターは、現在普及している数学を基にした暗号を解読できる可能性があります。理論上解読が不可能とされる量子暗号通信は、量子コンピューター対策のセキュリティ技術として普及が拡大するかもしれません。ぜひ日本の東芝に頑張っていたきたいと思います。

COVID-19 収束後、私たち神奈川放友会も現在の延長線での活動ではなく「人生百年」の意欲と COVID-19 の影響で生れた新しい社会制度を受け入れ「神奈川放友会アンケート調査」の集計報告等を生かし「立ち位置」を考え直してみましよう。

**神奈川放友会は新型コロナウイルス感染症収束されるまで活動を中止しています。  
情報は「ホームページ」に掲載致します。**

# 令和 2 年度 神奈川県放射線友の会 総会報告

令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で将来不安な新年度を迎えました。

神奈川放友会では、新型コロナ対策の影響を受けて、総会会場として設定していた横浜市立技能文化会館が閉館になり、技師会 504 号会議室に会場を変更しておりました。

また、今回の「緊急事態宣言」により市民の「不要不急の外出自粛」が強く要請されたことで、今回の情勢を鑑み理事会で協議、監事の助言等を得て、定款第 27 条（表決権等）により「書面評決が総会出席とみなす」・定款 25 条では、「総会は正会員総数の 2 分の 1 以上の出席がなければ開会することができない」との定款に則った解釈を優先し、総会を開催しました。

今回、定款に則り書面表決を実施したところ、4 月 18 日（土）現在の書面評決者は 45 名であり、会員数 62 名（4 月 1 日現在）の 72.6%でした。

従って総会は成立しました。

## 第 1 号議案 令和元年度事業及び会計報告総括

令和元年度事業計画に基づいた基本的な活動を行いましたのでそのすべてを報告します。

「施設見学・小旅行・懇談会・講演会」の事業計画による社会的な組織活動を目指しながら、今年度は次のようなことを実行しました。

その一は、イベント企画である「東京競馬観戦&参戦」と「放談会・懇談会」、施設見学では相模原の「JAXA & 相模原市立博物館見学」を行いました。また、旅行を兼ねた「六ヶ所村日本原燃見学」が実行できたことは、大きな活動のエネルギーとなりました。特に日本原燃の見学のために、勉強会の開催や「放射性廃棄物の処理」副読本及び「原子燃料サイクル施設」見学記をまとめ上げたことは、予想以上の活動の成果でした。

放射性物質の地層処理についての勉強会を開催することにより、「六ヶ所村日本原燃見学」企画案が成功し、10 人の参加で一泊二日の日程で訪問できました。放射性廃棄物の処理処分について学ぶ機会を得て、放射線に関する啓発活動の源となりました。

その二は、機関誌の発行とホームページの運営が予定通り実行できました。その結果は機関誌「神奈川放友会ニューズレター」に効果が出ております。

その三は、アンケート調査の実施でした。執行部の委員会改変により、構想委員会が設けられアンケート調査と共に会活動の発展を模索しております。更には、顧問の導入により会の発展運営に支援を頂いております。

賛成 45 名 反対 0 名 可決

## 第 2 号議案 令和元年度監査報告

### 1. 会計監査

事業計画の活動は参加者の参加費で順調に運営されています。

会計業務は理事会ごとに報告され、節約に努力され、正確かつ適正であることを認めます。

### 2. 会務監査

本年度の計画されたイベント事業、機関誌の発行、ホームページの運営は役員の努力により計画とおりに実行されました。

神奈川県放射線技師会との協力も強化されています。

NUMO 学習事業に参加し、六ヶ所村日本原燃原子燃料サイクル施設を見学し、その見学記や副読本「放射性廃棄物の処理を学ぶ」の刊行は大きな成果です。

組織の改編により設置された構想委員会の「会員アンケート結果」から、会員の増加を図り、会員の親睦を重視して、県民のための放射線診療や放射線の知識の啓発について今後の会運営が図られることを期待します。

神奈川県放射線友の会定款第 15 条により、令和 2 年 2 月 29 日に職務を実施したので報告します。

監事 中村 豊 ㊟  
橘 亨 ㊟

賛成 45 名 反対 0 名 可決

## 第 3 号議案 令和 2 年度事業計画及び予算案

例年通りの「背伸びせず、無理せず、急がず、身の丈相当」の基本方針での活動を目指します。

### 1. 事業計画

社会活動を考慮しながら、放射線関連情報の啓発に重点を置きます。この方針で、今年は第 2 回目の「講演と音楽の集い」を企画しました。会場は横浜ラポールシアターで行いますので、会員の参加支援をお願い致します。

放射線に関する啓発活動を目指した「食と放射線」シリーズ及び「放射性廃棄物 — 知り・学び・考えよう —」を利用することを考えて参ります。

更に、本会の活動評価は「機関誌の内容による」ことを念頭に置き、「神奈川放友会 Newsletter」発行が 50 回の節目を迎えておりますので、より機関誌の充実に努め、会員を意識した編集に心掛けて参ります。

活動の原動力は会員の組織力が第一ですので、アンケート調査を活用しながら、活性化に努めます。

事業の中味と予算は例年通りで代わり映えはしませんが、これまでの経験を生かした運営を心掛けますので、皆様の協力・支援をお願いします。

今年度の事業計画概要は、次の項目通りです。

① 「神奈川放友会 Newsletter」の発行（4 回/年）

- ② アンケート調査の解析と利用の検討
- ③ 「放談会」複数回の開催
- ④ 「講演会と音楽の集い」の開催
- ⑤ 神奈川放友会ホームページの更新努力
- ⑥ 施設見学・旅行・懇談会の開催
- ⑦ 地域における講演会の模索
- ⑧ その他

令和2年度予算(案)

収入の部	収入	予算額	前年度予算額	増減
	会費	64,000	64,000	0
	雑収入(寄付金)	10,000	10,000	0
	事業収入等	10,000	10,000	0
	前年度繰越金	98,797	80,226	18,571
収入合計	182,797	164,226	18,571	
支出の部	支出	予算額	前年度予算額	増減
	印刷費	25,000	25,000	0
	発送費	25,000	25,000	0
	活動運営費(会費)	10,000	10,000	0
	事務用品費	10,000	10,000	0
	会議室借用費	16,000	15,000	1,000
	会議費	10,000	10,000	0
	予備費	86,797	69,226	17,571
	支出合計	182,797	164,226	18,571

賛成 45 名 反対 0 名 可決

第 4 号議案 特別事業報告

(アンケート集計・日本原燃見学)

アンケート集計報告

Newsletter 50 号掲載「神奈川放友会」と「2025 年問題」を考える... 神奈川放友会アンケート調査実施について...そして、「神奈川県放射線友の会活動に関するアンケート調査集計報告(2020 年度)」を全会員に報告した。

これからの活動に生かす。

日本原燃「原子燃料サイクル施設」見学

2019 年(令和元年) 11 月 12 日(火)・13 日(水)にかけて青森県八戸市・六ヶ所村に行き 13 日(水)六ヶ所村、日本原燃「原子燃料サイクル施設」を見学した。見学団団長 長谷川 武、副団長 中村 豊、総勢 10 名にて見学した。

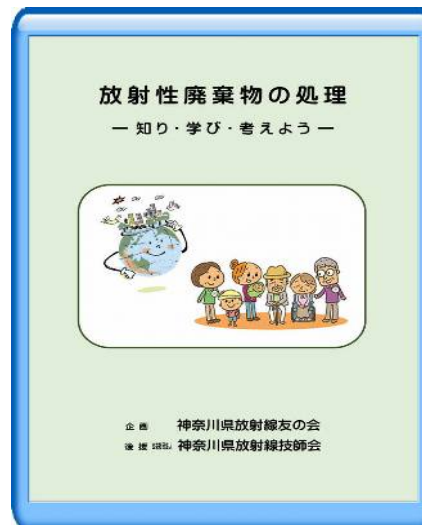
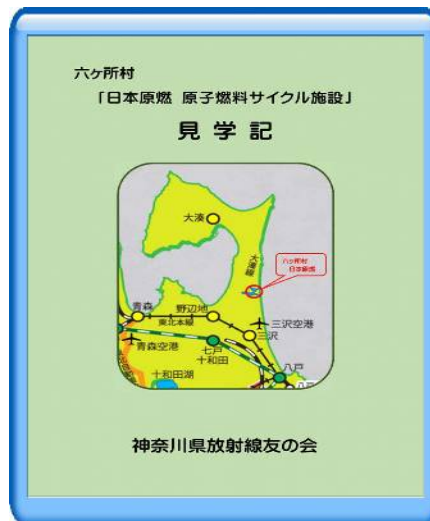
この見学事業は、日本原子力文化財団が、日本原子力発電環境整備機構(NUMO)の委託を受け「地層処分」について理解を深めたいと考える地域団体などに対して、地層処分事業に関する施設の見学や、専門家を招へいた勉強会などの開催を支援する事業です。

2018 年(平成 30 年) 7 月 11 日(水)・12 日(木)に東京電力福島第一・第二原子力発電所見学でお世話になった東京電力パワーグリッド株式会社神奈川総

支社のご紹介で、この見学事業に参加することが出来ました。

ここでの見学内容と原子力発電での使用済核燃料の問題に関心を持ちまとめた、六ヶ所村「日本原燃原子燃料サイクル施設」見学記(64 ページ)・放射性廃棄物の処理—知り・学び・考えよう—副読本(188 ページ)を製本しました。

六ヶ所村「日本原燃原子燃料サイクル施設」と「放射性廃棄物の処理」に関心をお持ちの方には配布いたします。(送料負担、お願いいたします。)



特別事業報告(アンケート集計・日本原燃見学)

承認

以上で、令和 2 年度の総会は書面評決で終了いたしました。

今年度の総会は異例な状態で開催、終了しました。これから新型コロナウイルス感染の第 1 波が収まり第 2 波・3 波と拡散する恐れがあります。

日本の生活様式、衛生感覚、受け継がれてきた文化により感染が少ないのではないかとされています。これからも 3 密・ソーシャルディスタンス等を守り、秋には活動が再開され皆さんと会える事を祈念しながら、感染収束に向け頑張りましょう。



## 地層処分事業の学習参加地域団体の全国交流会

中村 豊 (会員番号 8)

放友会は昨年の活動で原子力発電環境機構 (NUMO) の委託を受けた日本原子力文化財団の「高レベル放射性廃棄物の地層処分」について理解を深める活動に参加して、6回の勉強会を開き、六ヶ所村日本原燃原子燃料サイクル施設を見学した。その知見を見学記や副読本「放射性廃棄物の処理—知り・学び・考えよう—」にまとめて刊行した。この活動団体の全国交流会が下記の要領で開催された。

日時：2020年2月15日(土) 13:00~17:00

場所：フクラシア 東京ステーション

主催：経済産業省 資源エネルギー庁

原子力発電環境整備機構 (NUMO)

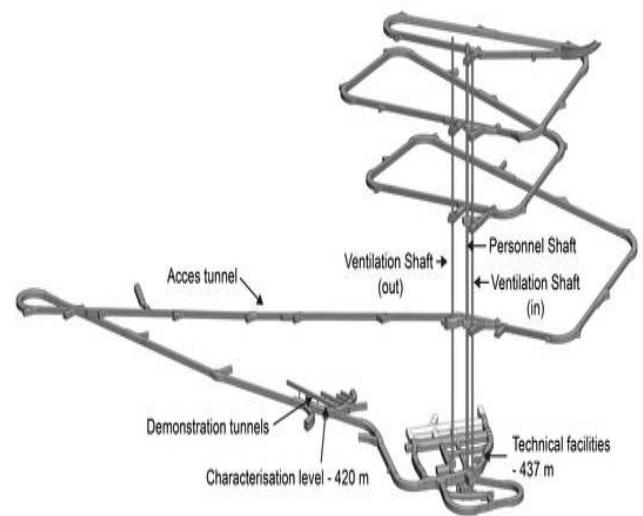
全国交流会は北海道から沖縄までの約50団体100名以上の会員が出席し、内容はプレス公開、インターネットライブ配信された。全体で約170名が参加した。放友会から長谷川会長と私が出席したので報告する。

那須 良(資源エネルギー庁 放射性廃棄物対策課長)、近藤駿介(NUMO 理事長)の挨拶の後、2019年度のNUMO活動報告が行われた。

NUMOが実施した取組みは、現在全国に約50ある関心グループの数を100程度に拡大するために、現役世代や若年層を含めた理解を促進している。「地層処分事業」を子供や孫の世代に先送りしてよいのか、分かり易いビデオを作成し、現世代が取り組む問題意識を高めるために、FUN(楽しいという感覚)を取り入れて、WEBやSNSなどによる理解活動を促進している。若年層への取組みは重要で、より理解しやすいビデオ、DVDなど教育プログラムを開発する方針である。次世代層の関心喚起、理解促進を目的に「提言コンテスト」を実施した。学習団体の取り組みとして、団体地域の関連施設の視察や交流活動を地域別の取組みとして6ブロックで実施した。「地層処分事業」先進国であるフィンランド、スウェーデンの処分地を視察し、地域の人の受け入れ合意形成を調査した。図はフィンランドの高レベル放射性廃棄物地層処分場オンカロである。



フィンランドでは1983年から地質調査などを始め、2000年に地元自治体議会でサイト建設を決定し、2004年に建設を開始して2011年に掘削を完了した。深さ約500m、坑道の全長9.5kmで使用済み核燃料を直接処分する予定である。

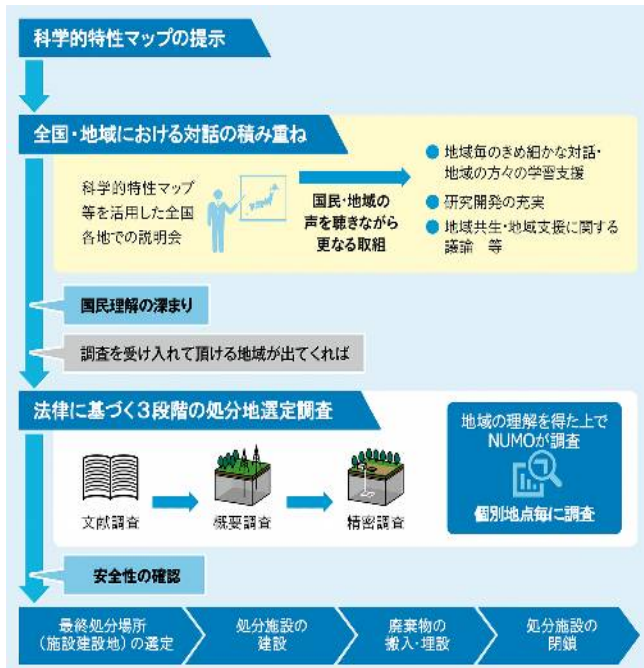
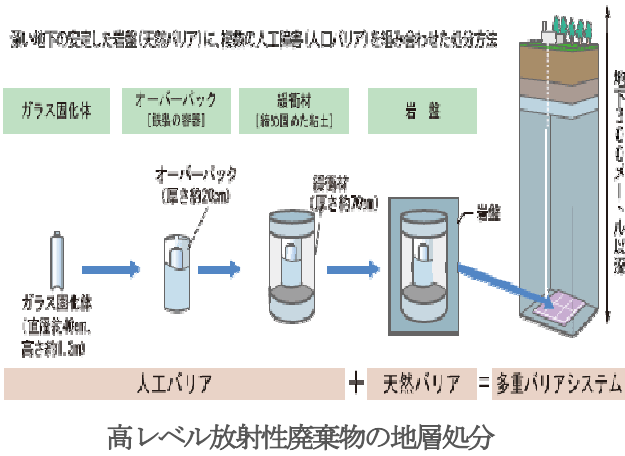


### オルキルオト高レベル放射性廃棄物地層処分場

次に中学生から大学院生を対象にした「私たちの未来のための提言~どうする?高レベル放射性廃棄物~」の提言コンテストの表彰式と提言に基づくパネルディスカッションが行われた。

全国から67名の応募があり、6名が表彰された。パネルでは「放射性廃棄物の地層処分」について市民・学生の「無知」、「拒否」、「無関心」を「知る」、「関連付ける」、「話し合う」、「発信する」のステップから「自分事」をOurs化「私たち事」へする提言がされた。また、「放射線・放射能」の学校教育について教育指導要領への取り入れや教育ツールの開発などの提言があった。さらに、「地層処分」を「地下保管」、管轄を環境省として環境問題として捉える提言や、放射性廃棄物を地層処分した時の被ばく量「 $2\mu\text{Sv}/\text{年}$ 」をマーケティング手法で地層処分を認知向上することなどが提案された。

このように「放射性廃棄物処分」の問題は、原子力発電による恩恵を享受した現世代の責任としなければならないが、数10年の事業となるため、若い世代の関心や理解促進は重要なことであると認識した。



地層処分までのスケジュール

休憩後、2会場に分かれ、ワークショップが行われた。私たちは地層処分事業に関する意見交換会に参加した。参加者がテーマに沿ったキーワードを提示して、自由に発言する OST (Open Space Technology) 方法により、提言コンテストの受賞者と交流を深めながら、これまでの課題や今後の解決策を共有し、今後の活動に繋げるための意見交換が行われた。テーマは次のとおりである。

(テーマ)

1. 大学生と高校生がコラボする学びの場
2. サイクル施設見学ツアー
3. 原発立地県での大学生と大人の学びの場
4. 教育支援教材集の作成
5. お母さん向け勉強会
6. 親しみやすい地層処分を考えるプロジェクト

「放射性廃棄物の地層処分」事業の認知度向上のためには学校、地域や家族の連携を継続することが重要であり、学生ネットワークや原子力関連全体会議などが必要であることがワークショップのまとめとされた。短い時間だが、希望者による懇親会も開催された。

放友会がこの事業に取り組んだのは昨年からのことであり、刊行した副読本「放射性廃棄物の処理—知り・学び・考えよう—」を参考として、知識を深め、県民・市民に広報していかなければならない。

日本では「放射性廃棄物の地層処分」の候補地が未定の段階だが、最終処分地は

- ① 生活環境の構築
  - ② プラス影響の最大化とマイナス影響の防止
  - ③ 安心して暮らせるまちづくり (NUMO ふるさとのみち)
  - ④ 事業にともなうインフラ整備 (地域の利便性の向上)
  - ⑤ 活気のあるまちづくり (生き生き地域社会の実現)
- など、NUMO が主体となり、計画されている。

活気ある地域社会の実現に向けて、地域の住民が健康的に文化的に生活できる安心・安全に暮らせる街づくりを図らねばならない。そのためには、

- ・地元経済の活性化に貢献する投資 (処分事業企業誘致、資材の地元調達、安定した雇用の創出)
- ・事業にともなう道路・港湾の改修・拡張
- ・情報通信システムの向上などのインフラ整備の投資
- ・若者が定着できる雇用の創出や技能訓練センターの整備と雇用につながる教育投資
- ・地域の利便性等の向上を図るための医療インフラの充実
- ・コミュニティーをつなぐ交通・情報インフラの充実
- ・魅力的なまちづくりのための文化的充実の投資などが必要である。



近未来都市ウーブン・シティ (Woven City)

その「まちづくり」のひとつとして、デンマーク出身の建築家ジャルケ・インゲルスが都市設計を担当し、トヨタが NTT と協力して 2021 年に着工する近未来都市ウーブン・シティが参考になる。

このプロジェクトは、人々が生活を送るリアルな環境のもと、自動運転、ロボット、スマートホーム技術、人工知能 (AI) 技術などを導入し、検証できる実証都市を新たに作るものである。人々の暮らしを支えるあらゆるモノ、サービスが情報でつながる時代を見据えている。

「放射性廃棄物の地層処分」事業都市が最先端の技術を導入し、市民が健康的に文化的に生活でき、新たな研究成果や文化醸成を生み出し続けるユートピアの実現を願っている。



# COVID-19 に感染！？ PCR検査受けた！

橘 亨 (会員 No46)

中国湖北省の武漢市で発生した新型コロナウイルス（以下 COVID-19）による肺炎は、昨年 12 月に武漢市で報告され、旅行者を通じて中国国内や、海外にも広がった。世界を震撼させた横浜港に入港した豪華客船「ダイヤモンド・プリンセス号」で発生した COVID-19 の集団感染はこの船に乗っていた一人の香港人乗客が香港で下船後、COVID-19 に感染していたことから始まる。

乗客乗員 3711 人のうち感染者が 542 人に達した。船内に 14 日以上隔離された後、各国のチャーター機でそれぞれ母国に帰国するも、アメリカではこの中に感染者がいた事が判明、それぞれの国にて更に数週間隔離されるも、ここから感染したと思われる COVID-19 の感染者数は、指数関数的に激増し、“オーバーシュート”をもたらししてしまった。日本とは例えば、海外からの帰国者、更にはダイヤモンド・プリンセス号に隔離された後、PCR 検査にて陰性となった乗客が下船を許可され、下船後、タクシーや、バス、電車に乗って帰宅している？！陰性で下船したはずだが、その後下船者から感染者が続出。COVID-19 の恐ろしい所はここである。感染しているのにほとんど症状がない、感染力が強力、感染スピードが速い、風邪の症状と似ているが、37.5 度以上の熱が 4 日以上続く、咳、鼻水、関節痛、全身倦怠、臭覚・味覚の異常があれば感染を疑い、PCR 検査が必要となる。この PCR 検査数が少なく検査数が伸びない。検査対象者がすぐに受けられなくて、重症化したり、そのまま死亡のケースも出てきている。受けたくても受けられない PCR 検査・・・この PCR 検査を私は受ける事が出来たのと何故この検査を受ける事になったかの体験談を語りたいと思う。

私がパート勤務していたクリニックの閉院が決まったのが昨年 12 月末、令和 2 年 3 月 31 日で閉院することになった。2 月中旬から 3 月に入り、当クリニックにも COVID-19 感染疑いの患者さんが、時々来院するようになり、疑いの患者さんは待合室ではなく、別の部屋に待機していただき、医師がそこに行って診察していた。また、この頃からスタッフは出勤時、検温をし、検温表に体温を記入することになっていた。コロナ疑いの患者さんが来た場合、情報がスタッフ全員共有できるようになっていた。3 月 31 日、私はこの日最後の勤務をしていた。勤務終了後解散式が設定されていたが、何だか朝から風邪気味で少し気分がすぐれなかった。お昼過ぎ検温すると、36.9 度、全身倦怠があり院長に相談、スタッフの皆さんに早目のお別れの挨拶をし、午後から早退した。ここからは、時系列で表記します。

3 月 31 日 昼 36.9 度にて午後早退 帰宅後検温すると、37.5 度 咳、鼻水、全身倦怠感強く解熱剤、風邪薬服用後就寝。

- 4 月 1 日 朝 検温 37.4 度 鼻水、咳強くやや息苦しい。関節痛、全身倦怠もあり一日中自宅でごろごろしていた。夜検温にて 37.6 度あり、引き続き解熱剤、風邪薬服用し就寝。
- 4 月 2 日 朝 検温 37.4 度 あまり変わらない。咳、鼻水、だるさも変わらない。夜検温 37.0 度、いづらか熱は下がったか？しかし念のため解熱剤、風邪薬服用し就寝。
- 4 月 3 日 朝 検温 36.4 度 (私の普段の平熱が 35 度台) まだ少し高い感じはするが、かなり楽になった。咳も出るが少なくなった。夜検温 36.0 度もう大丈夫だろうと、薬は服用せずに就寝。
- 4 月 4 日 朝 検温 35.9 度 咳だけ少し残るが身体も楽なので、ようやく風邪が治ったと安心した。午後、閉院したクリニックの事務員よりメールがあり、内容は「横浜市〇〇区福祉保健センターより当院受診患者でコロナ陽性の方ありの連絡が来ました。3 月 26 日外来内科受診し胸部 XP、採血実施しています。当日の出勤者で飛沫又は、接触感染の可能性のある方は 26 日から起算して 9 日まで 2 週間 の健康観察をして下さい。添付の健康観察表をお送りしますのでチェックをお願いします。症状（発熱、咳嗽など）が出た方、すでに出ている方はこちらのメールアドレスと 〇〇区福祉保健センターの“帰国者・接触者相談センター”に早急にご連絡下さい。」であった。これを聞き非常に驚いた。風邪だとばかり思っていたが、私の症状は新型コロナウイルスの症状に似ているではないか？また熱発したのもこの患者さんと接触してから 5 日後、これは怪しいと思い、事務の方に連絡をし、添付されてきた健康観察表を 3 月 26 日から遡って記入し、ひとまず 〇〇区福祉保健センターに状況報告すべく電話するも何度かけても話し中にて結局この日は諦めた。
- 4 月 5 日 朝 検温 36.0 度 (平熱) 咳のみ少し。午前 10 時頃より 〇〇区福祉保健センターに電話するも話し中、何度も試みたが午前中は繋がらず。午後電話かけ続け 2 時過ぎにやっと繋がり、色々質問され状況を説明した。最後に住まいはどこですかと聞かれ、川崎市 〇〇区と答えると、そちらの福祉保健センターに報告しておき

ますので、連絡が来るまでお待ちくださいと説明された。

接触者相談センター”からだった。その後の様子伺いであったが、今病院のコロナ外来にきていると話しているうちに事務員が来て誘導に従って診察室に入った。

医師も看護師も防護服の完全防護で、私はマスクをしたまま、上着・靴などをビニールの袋に入れ、看護師の指示に従って医師から2メートル離れ、更に医師に背中を向けたまま問診、経過説明、コロナ感染者と接触した時の状況を詳しく聞かれ、その場ですぐにPCR検査実施。かつて自分が勤務した病院ではあるが、こんな緊張感の診察は見たことがない。改めて新型コロナウイルスの恐さを知らされた。結果は早ければ翌日に電話すると言われ帰宅した。

4月10日 朝 検温平熱 検査結果を待っていたが連絡はなく、明日かなと思った午後6時過ぎに、電話が鳴った。結果『陰性』！安堵した。しかし、医師の説明で、陰性だから、全てよしではない、偽陰性もあり、症状が無くても陽性もあると。引き続き自宅で静養し、他人と接触しないようにときつく言われた。

ひとまず安心したものの気は抜けないとしっかりと自分に言い聞かせた。恐らく私は感染したものの症状が軽くそのまま自然治癒したのだと思っている。

その後、体調に変化はなく、元気に過ごしていますが、国の非常事態宣言も東京や、神奈川県は未だ解除されない。解除されても再び人々が密集することになれば、また2次感染、3次感染は起こるだろうと思います。まだまだ収束の先は見えない。私は近くに息子家族が住んでおり、孫もいますが、2月から一度も会っていない。家族を大切にしたいので、これからは暫くは会わないと決めています。

**兎に角今は、家にいる事、他の人に  
接触しないこと、手洗いの慣行を守  
り、1日も早い収束を願うだけです。**

**医療従事者は命をかけて戦って  
います。共に耐えましょう！**

4月6日 朝 検温35.8度(平熱) 午前中、川崎市OO区の連絡を待つも、一向に来ない。昼過ぎ何やら妻がひどい咳、熱っぽいと言うので検温すると37.5度！まさか?!と思いい、午後直ぐに電話してみたが、やはり何度電話しても話中音。夕方やっと繋がりに聞いてみると横浜市からまだ連絡ありませんとの返事。とりあえず状況をお聞きしますと言われたので、また最初から説明し、妻の事も伝えた。またこちらから連絡するまでお待ち下さいとの事であった。妻は解熱剤服用し、就寝。

4月7日 朝 検温私は35.9度(平熱)、妻は36.4度、妻の熱も下がり咳もほとんど治まった。この日の朝、川崎市OO区“帰国者・接触者相談センター”にこの日までの健康観察表をメールで送信しておいた。午後連絡あり、貴方は37.5度以上の高熱が4日以上でもなく、感染していた患者さんとの接触時間も短く、接触時にマスクも着用されていたので、濃厚接触者に該当せず、PCR検査の対象外になります。引き続き今後2週間自宅にて静養して下さい。もし急な熱発や急変した場合、救急車を呼んで下さいと。

4月8日 朝 検温私は35.8度、妻36.1℃。もうすっかり体温は正常、ただ時々咳がまだ出る。引き続き自宅にて静養するも、やはり心配である。自分は感染したのだろうか？後2週間後、外に出て他の人と会話して大丈夫なのだろうか？非常に不安。PCR検査受けて白黒はつきりさせたいという気持ち強いものの、対象者ではないので、受けられない。しかしコロナ感染者と接触したのも事実であり、熱発、咳、全身倦怠などもあったのも事実、高齢者でもあり、昨年は心不全にもなっている何とか検査を受けたいとの思いが強く閉院したクリニックの院長だった主治医に相談した。この院長はクリニックに来る前に以前私と同じ総合病院に勤務していたので、この病院はコロナ外来があり、直接院長から相談して頂いたところ、明日、コロナ外来に来るように連絡があった。

4月9日 朝 検温平熱、咳のみの症状で自家用車にて指定時間にコロナ外来へ。コロナ外来の入り口は、一般外来とは全く別の場所で、建屋外で待つように指示され待っていると、携帯電話が鳴った。川崎市OO区“帰国者・

## COVID-19 との闘い 中村 豊 (会員 No 8)

桜の季節を終え、爽やかな五月の空にツツジが咲き、若葉、青葉が美しい。普通ならば2020年東京オリンピック・パラリンピックの開幕に向け、聖火ランナーが国内を走っている頃だろう。国内を走り回っているのはCOVID-19だ。今年のGWは山歩きも自粛して、SHW (Stay Home Week) になってしまった。

暇を持て余しているのも、世界のCOVID-19との闘いについて苦言を含め、書いてみたい。

先ず、発生源の中国からだ。COVID-19の宿主はセンザンコウまたは蝙蝠といわれ、人への感染は武漢のウイルス研究所(?)または海鮮市場からといわれている。「新型コロナウイルス」の発生が報じられたのは昨年(2019年)の11月22日だ。診断した医師(後にCOVID-19で死去)がSNSに「複数の新型コロナウイルスの患者が発生している」と報じたが、中国当局はデマだとしてデータを隠蔽し、公開しなかった。今や世界第二位の経済大国である中国・習近平主席は米国トランプ大統領の「アメリカ第一主義」に対抗して、「一帯一路主義」を掲げ、シルクロード経済圏構想を着実に実施している。このロードに乗り、COVID-19はヨーロッパに蔓延していった。中国が新型コロナウイルスの発生を世界保健機構(WHO)に報告したのは12月31日、武漢を封鎖したのは1月23日からである。しかし都市封鎖(ロックダウン)が遅れたこと、封鎖前に脱出した武漢市民が多かったこと、さらに春節の移動を禁止しなかったことで、COVID-19の世界大流行(パンデミック)の原因になった。WHO、ヨーロッパ、アメリカ合衆国は事態を過小評価して、感染防止の対応が遅れてしまった。今や(4月末)世界の感染者数は320万人、死者は23万人に及んでいる。

韓国は中東呼吸器症候群(MERS)流行の教訓を生かし、COVID-19の鎮静化に成功した国の一つだ。その戦略は大

量のPCR検査キットや感染者を隔離する施設の準備などだが、最も有効だったのは国民すべてに付けられた番号とスマホによる位置情報(GPS)であろう。これにより集団発生(クラスター)を把握して、感染者を隔離できたことによると推測される。

さて、日本のCOVID-19の対応戦略はどうだろう? 増えぬPCR検査対応、感染病床の不足による医療崩壊の恐れ、緊急事態宣言(4月7日発出)の遅れなど、福島原発事故調が指摘した教訓が生かされず、後手、後手の政策と縦割り行政のスピード感の無さは危機管理体制の改善が図られていない。まさか「想定外」ではないだろう。装着がエチケットといわれる市販マスクが手に入らない。ほとんどが中国製だ。これは経済的効率のみを追求した過剰なグローバル化ではないだろうか。

近代社会の人間の流通量とスピードに伴い、COVID-19感染は凄まじい。COVID-19は暮らし、経済など民主主義との闘いでもある。病原菌と人間の闘いは永遠に続くだろう。これは地球環境まで壊すような人間の活動に警鐘を鳴らしているのではないだろうか?

COVID-19の終息はワクチンの完成を待たなければならぬ長期戦となるのだろう。今は人との接触を減らす「新しい生活様式」の定着が必要とされている。

特に、高齢者は3密(密閉、密集、密接)を避け、手洗い・うがいを励行し、3良(運動、栄養、睡眠)を守り、他人への「思いやり」と「信頼」を持って、COVID-19に「うつらない」、「うつさない」を心掛け、静かに暮そう。

発行される頃にはCOVID-19が鎮静化していることを切望しています。

## COVID-19に思う 小松崎 眞一 (会員 No 17)



新型コロナウイルス感染が拡大した時、未曾有の事態になったと思ったのは私だけではなかったのではないかと。

第一次世界大戦が起こったのは生まれる前でした。第二次世界大戦は生まれた真っ只中であつた。

第三次世界大戦が空想されたのは1960年代である。1959年20世紀フォックス社によって作成された映画「渚にて」英語名「On the Beach」オンザビーチでした。私16歳の年で核戦争が起こり、人類が滅亡してしまうストーリー。その後1970年代にDVD化された(写真)のを買った。

2011年福島第一原子力発電所事故は、難民が道路を歩いている想像に悩まされた。そして再びこの映画を見た。今年四月に入り再々見ることにした。それほど衝撃的な新型コロナウイルスを感じ長年に渡り世界の危機と向き合った思いがした。COVID-19が今後人類によってコントロールされていく事を願っている。

### みんなの広場

■ 7月に予定していました第2回「講演と音楽の集い」は、新型コロナウイルス感染症拡散防止のために事業が中止になりました。

### 編集後記 ☆ ★ ☆ ★

COVID-19の影響で事業が中断しています。メール等にて情報を送ってください。

会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。

【広報委員会】早瀬・櫻田・小嶋・仙臺・小松崎